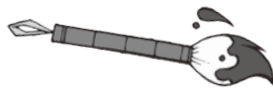


## 新・下野市風土記

わ 倭から につぼん 日本へー新しい国のかたちー



下野市教育委員会 文化財課

しもつけ風土記の丘資料館の改修に合わせて常設展示もリニューアルしたことは、以前にもお知らせしました。今回の展示替えて新たに設けたコーナーに、飛鳥時代を扱ったものがあります。

飛鳥時代は、710年に平城京へ遷都するまでの時代を指します。倭から日本へと国号が変わり、国内で大きな制度改革が行われ、政治や社会などが大きく転換した時代です。

西暦581年、隋が中国を統一し、東アジア諸国は緊張状態となります。朝鮮半島の高句麗・百濟・新羅の三国と倭（日本）は歴史の激流に呑み込まれ、各国とも世界へ目を向けざるを得なくなりました。

592年、倭では女帝・推古（大王）が飛鳥豊浦宮で即位し、それから約一世紀にわたり、飛鳥・難波・藤原（新益京）の地が激動の古代政治史の舞台となりました。

推古天皇のもとで政治を行った蘇我馬子や厩戸皇子（聖徳太子）は、倭が東アジア諸国と対

等に渡り合える国となることを目指し、数度にわたり遣隋使を派遣しました。

2人は、隋や半島諸国の先進的な政治・経済に関する制度を積極的に取り入れ、冠位十二階（朝廷に仕える臣下を12の等級に分け、地位を表す冠を授ける制度）や十七条憲法（官僚や貴族に対する道徳的な規範を示した）などを制定しました。

また、当時、東アジアの各国が信仰を深めていた仏教の教義や文化も、この頃、倭にもたらされました。

蘇我馬子の孫にあたる蘇我入鹿が倒された大化の改新から、10年余りが経過した天智2（663）年、倭は、友好国であった百濟の救済のため、朝鮮半島に派兵します。しかし、白村江の大海戦で、倭の水軍は唐・新羅の連合軍に大敗を喫し、ほうほうのていで帰国しました。

この敗戦により危機感を抱いた天智天皇は、天智7（668）年の正式な即位後、唐や新羅が採用していた先進的な政治制度、律令制の導入を模索し、唐との友好関係を樹立。遣唐使を派遣し、新たな政治制度や文化を取り入れようとしたのですが、それらがもたらした急激な変化は、国内で様々な対立を生み出す要因となりました。

やがて、天智天皇が急死したことを受けて起こった王位継承問題は、古代の最大の内乱である壬申の乱へと発展しました。

乱を制した天武天皇とその妻、持統天皇の時代に、天皇を中心とする中央集権的な律令国家の枠組みが整備されました。また、それまで用いられてきた国号「倭」に代わり、新たな国号「日本」が定められました。

天武天皇の即位から10年が経過した680年代には、新益京（藤原京）の造営が本格化します。それまで都が置かれていた飛鳥浄御原宮は、地形的な制約のため、首都機能の集約や官僚制の

整備に伴う官庁街の拡張が困難だったためと推測されます。さらに、飛鳥に残る旧来からの豪族を牽制する目的もあったようです。

途中、複都制により難波宮も整備されましたが、朱鳥元（686）年に全焼。その後、天武天皇の遺志を受け継いだ持統天皇が新益京の建設を推進し、建設開始から10年以上の歳月を経た持統8（694）年に、遷都が行われました。

都や政治機構の整備と共に、経済の根幹である貨幣（富本銭）の発行や、この国の行政・司法の骨格となる法律＝律令の編さんなども、同時に進められました。

この法整備を進めた19人の中には、藤原不比等をはじめ、渡来系氏族の他、当地と深い関わりのある下毛野朝臣古麻呂がいました。

古代、東国の出身の人物で、その生涯の功績を追える存在は極めて稀有です。古麻呂の後にも石代や虫麻呂を輩出した下毛野朝臣一族は、古代日本の政治や文化の進展にも大きく関わっていたと考えられています。

ちなみに「日本」は、当時の別の読み方で「じっぽん」とも読みました。これが変化してマルコ・ポーロの『東方見聞録』の中で「ジパング」としてヨーロッパに紹介され、やがて「JAPAN」になったといわれています。